



上林曉全集十

筑摩書房

上林曉全集

昭和四十一年十二月二十五日第一刷発行

著者 上林 曉

發行者 竹之内 静雄

發行所 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京 〇七六五一（代表）
振替 東京 四一 二二三

印刷 多田印刷株式會社
製本 矢島製本株式會社

© A. Kanbayashi

上林曉全集第十卷目次

同病相憐	三
ロマネスク	二四
浴泉記	五四
舊病院	六三
泰作咄	八二
赤犬の徒	一〇一
村八分	一二四
病友	一三四
大懺悔	一五四
聖ヨハネ病院再訪	一七五
榮硯	一九五

三人姉妹	二〇
説教聽聞	三六
死と少女	三五七
酒の戒め	二八二
着物について	二九七
糠味噌	三一
伏字	三三
インバネス	三七
光明院の鐘の音	三五五
孤獨人	三六六
子の世代	三八四

この世の見直し……………四〇九

卓上演説草稿……………四二五

青疊……………四四二

やもめ……………四五七

書誌……………四六九

小說
十

同病相憐

坂上の酒屋、虎屋の主人が、私と同じ腦溢血を患つてゐることを知つたとき、私は急に虎屋さんを身近かに感じた。虎屋さんも、私の家に来る醫者にかかつてゐたといふので、その醫者の話に出たのだつた。さう言へば、前年の秋、虎屋さんが杖に縋つて、俄に老いぼれた姿になつて、阿佐ヶ谷の方からよろよろと歸つて來るのに出會つたことを思ひ出した。

「虎屋さんの倒れたのは、いつ頃のことなんですか。」と私は醫者に尋ねた。

「ほぼ一年になるでせう。去年の春先だつたやうに覺えてゐます。」

「そんなになるんですか。」

「私の家の前をよく歩いてゐますが、もう殆ど普通と變らないくらいです。知らない人だつたら、氣がつかないでせう。」

「僕も早く、そんな風に歩けるやうになりたいものですなア。」と私は虎屋さんを羨んだ。醫者が入つて來ての話で、梅がきれいに咲き出してゐるといふことだつたから、猶更だつた。

「暖くなれば、貴方もう直ぐ歩いて出られますよ。虎屋さんも輕かつたんですが、貴方の方はそれよりも

もつと軽いんですから。」と醫者は私を慰めた。

虎屋さんは、荻窪の同業者が死んだので、その葬ひの手傳ひに行つてゐて、發病したのだといふことだつた。からだが大儀で、目がくらみ、手脚が痺れるやうな氣がして來たので、しばらく縁臺の上に寝そべつてゐて、それから歸つて來て醫者の診察を受けたのだつた。腦溢血の發作が起る前兆かも知れないから安靜にしてるやうにと注意を與へ、注射をして、醫者は歸つた。翌る日往診に行つてみると、すでに虎屋さんの手脚は麻痺して、だらりとなつてゐた。あまり變り方が激しいので聞き糺してみると、虎屋さんはその夜、何十回となく家の中を駈足して廻つたといふのだつた。「これしきのこと、少し駈足すれば癒るんだ」と言つて、うんうん走り廻つたといふのである。

「無茶なことをしたものですよ。」と醫者は笑つた。「あんなことをしては、どんな病氣だつて、悪くならないはずはないですよ。」

「虎屋さんは、若い時海軍の水兵に行つてたさうですから、あの時分の暴勇を揮つたわけでせうなア。」と、私も愉快になつて笑つた。

私も虎屋さんも、戰爭中荻窪警察署管内の警防團に屬して一緒に働いたので、その頃は心安い間柄だつた。先遣隊といふ名目で、私の家の筋向ひだつた町會事務所に、警報の出る度に一緒に詰めたこともあつた。虎屋さんは話上手で、また話好きで、いつも獨り占めにして、水兵に行つてた時分のことなどを面白可笑しく話して、よく私達を笑はせたものだつた。顔中粗い鬚もじやで、物凄い防空頭巾をかぶり、恰も象徴であるかの如く鳶口を突き、椅子に腰かけて、大火鉢のふちに兩股を張つてゐた虎屋さんの姿を思ひ浮べると、家の中を駈けずり廻つたといふのが如何にも似つかはしく、愉快に思はれて來てならないのだつた。終戦後は疎くなつて、たまに行き會ふことがあつても、軽く會釋するくらゐで、言葉を交すことももうなくなつてゐ

たのが、同病と聞くと同時に、ふたたび虎屋さんに身近かな關心を感じはじめたのも事實だつた。

「虎屋さんが來ませんでしたか。」

その頃、醫者は一週間に一度、火曜日に來て注射をして行くやうになつてゐたので、その次ぎの火曜日に來た時、さう言つた。

「いいえ、來ませんけれど。」

「この間會ひましてねえ、貴方の御病氣のことをお話したんですよ。さうしたら、驚きましてねえ、徳田さんなら、警防團でよく知つてる、早速お見舞に行かうと言つてたんですが。」

「さうですか。ぢやア、そのうち見えるでせう。」

「虎屋さんのところには、やれ猿の頭を煎じて飲むといいとか、やれ柿の澁を飲むといいとか、やれ斷食療法がいいとか、色んな話を持つて來る人があるんださうですが、貴方のところへは如何ですか。」醫者は左手の靜脈に注射する用意をしながら言つた。

「いいえ、僕のところへは、何んの話を持つて來る人もありません。」

「それならいいですが、そんな話を信じてはいけませんよ。」と醫者は頭を振つてみせた。

そのうち私は起きて、どうにか近邊を歩けるやうになつて來ると、必ず足を停めるのが、三州屋といふ酒屋の店先だつた。私の取りつけど酒屋だから、主人もかみさんもきさくに、いつも私の話相手になつてくれるのだつた。そして、そこで極まつて話に出るのが、虎屋さんのことだつた。

「虎屋さんは毎日のやうにうちに來て、その座敷で半日寢てゆきますよ。」と主人が言つた。近所の同業だから、親しい附合ひなのだつた。

「さうですか。半日よその家で寢てゐられれば、大したことですよ。僕なんか、半日は愚か、十分と家を離

れてゐると、不安なんですからねえ。」

「おひるに饅飩を出しても、二杯とは食べません。一杯きりですよ。」とかみさんが言つた。

「この病氣には、小食がいいさうですからねえ。僕も、饅飩や蕎麥は一杯です。」それは醫者の教へた通りだと思ひながら、私は答へた。

「こんな若布^{わかふ}なんかがいいと言つて、よく食べるらしいですよ。」と、主人は店先に並べた若布の束を指しなから言つた。

「もちろん酒も飲まないでせうねえ。」と私は笑つて言つた。

「酒も煙草ものみません。」とかみさんが答へた。

「煙草ものまないんですか。それはえらいなア。僕はこいつがやめられなくて弱つてゐるんですよ。」と、私は左手指に挟んだ煙草を目の前に見せた。

「この正月、わたしたち酒屋の新年會があつた時、あの人は話が面白いですからねえ、自動車を差向けて來てもらつたんです。その時も、酒は一滴も飲みませんでしたよ。」と主人は虎屋さんの禁酒を繰返した。

「酒は一番怖いですからねえ。虎屋さんも、酒は好きだつたでせうがねえ。」

「好きでしたよ。よく飲みましたよ。」

「虎屋さんは幾つかな。虎屋つて言ふから、寅歳の生れぢやないかな。」と私はせんさくした。

「さう、寅歳ですよ。」

「ぢやア、多分五十だな。同い歳だな。僕も寅歳で、五十ですから。」

「虎屋さんもたしか五十です。同じ五十にしては、旦那の方が虎屋さんより若く見えますよ。」

「いやア。」と私は逃げた。「僕の仕事はからだを使ひませんからねえ。」

「でも、旦那もお酒が飲めなくなつて、お淋いでせうが、命拾ひをしたから、よかつたですよ。」とかみさんが慰めた。

「まア、さう思つて諦めてゐますが、お宅とも縁が遠くなりましてねえ。病氣の前頃には、朝つばらから駆けつけて、迎へ酒にビールを提げて帰つたりしてゐたんですが。」

「うちと縁が遠くなれば、結構なことですよ。」とかみさんが大口開いて笑つた。

「虎屋さんが見えまして、大事になさるやうに、よろしく言つて下さい。序に、僕もこの程度になつてゐて、見たままを言つていただけると有難いんですが。」

私は主に夜分、三州屋の前に立つては、こんな無駄話をして氣散じをしてゐた。その都度、それが虎屋さんの耳に入るのであらう、四月になつた或る日の夕方近く、一度會つて話したくてならなかつたといふ風な顔をして、夕映えを背に受けた虎屋さんが、私の家の玄關に現れたのである。敷居を跨がうとする虎屋さんを見て、その不自由さうな足取りに、私は驚いた。一寸見ただけで、私の病氣より重さうだつたのである。杖を突き、草履をはいてゐたが、左の足首から先が萎えてゐて、やつとこさ足を引きずつて、敷居を越えるのだつた。私も左半身が不隨で、左脚は殊に痺れてゐるのだが、麻痺感以外に支障はなく、普通の歩き方が出来て、足を引きずつて歩くなどといふことはなかつたのである。虎屋さんは私の出て来るのを見ると、小縁に腰を下しながら言つた。

「どうです？ お元氣さうぢやないですか。」それだけでも、久しぶりに接する、虎屋さんの爽かな辯口だつた。

「おかげさまで、この程度になりましたねえ。あなたは、僕よりもつと好調のやうぢやないですか。」私は傍に坐つた。

「もう何日になりますか。」

「百日くらゐです。虎屋さんは？」

「わたしは、今日で丁度、一年と一ヶ月と十日になります。」病人の癖で、毎日日数を指折り數へてゐるらしい答へ方だつた。

「ぢやア、大分先輩だ。歩かれるはずですねえ。」と私は笑つた。

「阿佐ヶ谷へも、十五回行きました。」これも、指折り數へてゐるらしい話し方だつた。

「そんなに度々行つたんですか。僕は歩いて、精々三州屋止まりですからね。阿佐ヶ谷まで出かけられるやうになるのを、目標にしてゐるんです。阿佐ヶ谷の踏切あたりの人込みの中に立つことを考へると、ふらふらつと來て、ぶつ倒れるんぢやないかと思つて、心配ですよ。」

「やつぱり目まひがしていませんねえ。」

「さうでせうねえ。虎屋さんは、足を少し引きずつて歩かれるやうだが、よく阿佐ヶ谷まで行かれますねえ。痺れてはゐませんか。」

「痺れてはゐません。」

「さうですか。僕は引きずつては歩かないが、その代り、電氣が通つてゐるみたいに痺れてゐて、歩いてゐると、それがだんだんひどくなつて來て、不愉快なんです。ぢやア、ほかのところも痺れてないんですか。」

「全然、痺れてゐるところはありません。」

「僕は、こども、こども。」と言つて、私は左頬つべた、左頸、左手先、左脇腹など、痺れた個所を示した。

「人によつて、病氣の現れ方が随分ちがふですねえ。あなたは足を引きするのに、僕は引きすらないし、僕は痺れてゐるのに、あなたは痺れてないし。」

「この病氣くらゐ、幾通りも現れ方のある病氣はないさうですよ。細かく分ければ、六百幾通り、大きく分けても、六十幾通りあるさうですからねえ。」私もさうだが、虎屋さんも、病氣で、物知りになつてゐるらしい話しぶりだつた。

「そんなに幾通りもあるんですかねえ。僕は今日まで、重い軽いの別はあつても、みんな同じ現れ方をするのかと思つてゐましたよ。」

「どうして、どうして。現れ方が微妙なせるか、なんだかんだと薬は多い癖に、これと言つた妙薬もまたない病氣ですなア。」

「さやうですなえ。」

「わたしは、一本二千圓するアメリカの注射をやつてみたんですが、別に良くもなりませんア。」虎屋さんはきれいに剃つた顎を撫で廻した。

「さうでしたか。僕はなんにもしないですよ。基本的な、醫者の言つた注意を守るだけで、あとは放つたらかしです。」

「自然に任して、良くなるのを待つよりほかはありませんア。わたしはこの頃退屈ですから、盆栽に擬つてゐますよ。」

「僕も少し草花を買つて來させて、金魚草だとか百日草だとか石竹だとかを植ゑて楽しんでます。」

「わたしは庭に岩を据ゑましてねえ、それに小つちやな松を百二十本くらゐ植ゑてゐるですよ。」

「一つの岩に、そんなに澤山植ゑるんですか。」私は興味を唆られて驚くと同時に、毎日退屈を噛みしめて松作りに餘念ないらしい虎屋さんの姿を思つた。

「植ゑるんですからねえ。まだもつと植ゑるつもりなんですよ。」と虎屋さんは顔を輝かせた。

そんな話のあと、最後に私は立上つて、後向きになつて、座敷を歩いて見せた。

「僕の歩きつぶり、悪くないでせう。」私は尻のあたりに手を廻しながら言つた。

「うん、わたしよりスタイルがいいや。」虎屋さんは感心した顔をして、笑つた。

「残念ながら、ここから下が痺れましてねえ。」私は座に戻りながら、左脛をたたいた。それは、痺れた脚をいとはしむとともに口惜しむ仕種^{ししゅ}だつた。

虎屋さんはハンチングを冠り直して、腰をあげた。

「それでは、お大事に。」

「どうもありがたう存じました。そのうち、もう少し歩けるやうになりましたら、僕の方からおうかがひ致します。まだ一寸遠いし、あの緩い坂でも難關に思はれますから。」

私が虎屋さんを送り出すと、隣の茶の間で、妹が笑ひこけた。

「何が可笑しいの。」

「だつて、兄さんと虎屋さんの話を聞いてると、子供みたいに面白がつて、いつまで話しても、興の盡きるのを知らざる有様なんだから。」妹は腹をよちつてゐた。

「實際興が盡きないから、不思議だよ。」

「病氣の話が、そんなに面白いものなのか知ら。」

「面白いんだ。病氣の話でも、たしかに面白いんだ。熱が高いとか、どこか痛いとか、そんな病氣だつたら、さうは行かないだらうが、この病氣は、我々程度だつたら、別に苦痛はないんだからねえ。」

「それにしても、兄さん達の話の聞いてると、どんな面白い話をするよりも、面白さうだつたわ。」

「さうかも知れん。病狀は輕くても、安心ならぬ、怖い病氣を、お互に通ひ抜けて來たんだから、話したい